

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

韓国における生活文化研究と生活財生態学

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 周, 永河 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001856

韓国における生活文化研究と生活財生態学

周 永河

1 はじめに

ドイツの日常生活史研究者の一人であるボルシャイト (Borsheid) は日常生活 (everyday life) を、衣食住のようにもっとも基本的で物質的な生活形態として毎日毎日反復され、長期的に持続する習慣となった生活と定義する。彼によれば反復性と持続性という特徴を持つ日常生活は、習慣化という生のあり方に依拠し、安定と平穩を維持させてくれる生の場である。これは、人々が独立した生活単位として一定の枠組みにはまっているということではないが、新しい物事に接することによって引き起こされる衝撃とそれによる緊張および葛藤を解消させてくれる安定した生の場でもある¹⁾。

ボルシャイトが言った日常生活とは、言い換えれば衣食住を中心にした日常的な生が営まれる「チプ (집: イエ)」という空間から生じる文化的行為を示す。空間としての家は、人々の日常的な行為が生じる場所であるためだ。周知のとおり「チプ」ということばは、おおよそ二つの意味を持っている。まず寒さ・暑さ・雨風のごときを防ごうと建てた物理的な構造物を示す時に、家ということばは使われる。他の意味で家は、人々が作り上げるもっとも最小限の社会組織である家族が生活する空間だ。従って「チプ」は家族を囲んでいる単純な物理的構造物であるのみならず、家族が属している文化の多様な姿を反映する文化的空間である²⁾。すなわち「チプ」ということばには、家屋 (housing) という建築物とその構成員を示す世帯集団 (household) という意味が同時に込められている。人の行為は空間の中で行われ、空間は現実的な実体でありながら、想像の中に存在するものであり、象徴的・隠喩的な概念として構成されたものである³⁾。つまり文化的産物 (cultural artifact) と文化 (culture) を一つの空間の中に置く場合、物理的でありながらも文化的な空間である家で行われる世帯集団の行為が持つ意味に対して、よりリアルに接近することが出来る。

このような意味で「チプ」という空間で行われる人々の行為は、広い意味において日常的な生活が主軸となるが、別の側面においては世帯集団が中心となる各種の儀礼的行為までを包括するものである。たとえ家という空間がそれより広い範囲である公的領域とは区別される私的領域としてのみ規定されることがあろうと⁴⁾、だからといって私的領域で行われるあらゆる活動が単に非公式的な意味しか持たない訳ではない。歴史的段階に沿って家という空間が各種の生産活動の単位として持っていた機能が公的領域に移転されてきたということは事実であるが、それでも今日のような後期資本主義社会で家という空間が単なる休息のための非儀礼的・非政治的な領域に過ぎないということには

ならない。私的領域が公的領域の指向するところと相互に結び付いているという点を認めるならば、家という空間で行われる行為は、日常的とか非儀礼的とかいうこととは関係なく、一定に社会的で政治的な意味体系の中で作用する場合が多い。

一般的に家を中心に行われる物事に学問的に接近する学問分野は、家庭学ないし家政学⁵⁾と呼ばれてきた。しかし今日では家政学科ないし家政学部は大部分の大学で消えていき、その代わりに生活科学部という表現が多く使われる⁶⁾。だが、主として衣食住を対象としている点においては、家政学部の当時と大きな変化がない。しかし生活科学が目指そうとするところは実際のところ、家という空間で行われる物事よりも、公的領域で吸収した衣食住部分に重点を置いてそれに技術的に接近しようという傾向が強い。このような意味で、人々の日常生活が営まれる家という空間の中で行われる行為に対する生活科学からの研究は、過去の家政学になかなか取って代わられるものではない。

実のところ最近の韓国民俗学会で論議されている生活史ないし生活文化に対するアプローチは、多分に日常生活に対する関心から台頭したものである。例えば、一定の時空間に置かれた人間の日常的な生を生活文化と規定し、韓国人がこの地で生きながら経験する生活体験をどのように歴史的にカテゴライズして慣習的な態度に体系化したかを明らかにすることが韓国民俗学の課題だと強調していたりする⁷⁾。このような面から、人間の最小集団である世帯集団が生活を維持する家という空間と生活文化の研究は、民俗学の研究においてももっとも基本となる分野だと言える。だが、本来より韓国の民俗学で接近してきた衣食住中心の生活文化についての研究は、分野史の傾向を多分に持っている。例えば食生活史・服飾史・住生活史のような研究が、まるで民俗学の生活分野の研究であるかのように錯覚される傾向がある。このような面で、韓国の民俗学における生活文化についての理解は、未だに更なる概念的作業が要求されているのである。

かつて人類学者タイラーは彼の著作『人類学 (Anthropology)』において、人間が道具を使用するという側面において他の動物とは異なり、道具の使用は人間が自らを維持し支える上で必要な生の技術 (Arts of Life) であるとした⁸⁾。また衣食住に関し人々が行う物質の生産と消費に対する考えを生活技術と称する場合もある⁹⁾。すなわち生活技術とは、人々が最小限生存のために身につけた戦略であり、これは家族という組織の中で学習により伝承される傾向が強い。従って生活技術は、生活文化を生産し消費する上で必要な知識の体系である。このような面で生活文化とは、家という空間で世帯集団が持っている生活技術の総合を示すと定義できる。

だが生活文化にどのように接近するかという方法論的問題に手を付ければ、家政学や生活科学を学習しない民俗学者は難関に陥る場合が多い。例えばこれは人類学者の作業であるが、次の例はこのような問題点を如実に提示している。全京秀は「衣食住と道具」(『韓国の郷村民俗誌 (Ⅲ) —— 仁川広域市江華郡篇』)¹⁰⁾ という文章で、住居生活は住居形態の外層しか扱わないとか道具的な側面だけに留意するというような姿勢では理解

しえず、それを構成しその中に暮らしている人々の構成と思考を見せることによって、外層によってのみ見せやすい技術 (technology) の側面がどのように全体の文化に統合的に機能しているのかを論じた。すなわち家の形態を中心に、基本家族・拡大家族を分け、彼らが空間の中でどのように生活を営んでいるのかを重点的に眺望した。しかし飲食分野では、ただ主食・副食・特別料理・儀礼料理とともに、料理の保管法、釜、おかずの主な調理法というような記述に留まっている。服飾分野では、更に理論的な見解を持ち得ないまま、韓服の消費に焦点を当てて事例を羅列するだけだった。

理論先行で実践が先立たないこのような生活文化研究を改善できる一つの方法として、筆者は日本の生活財生態学が韓国の学界に導入される必要があると見る。ただし生活財という用語が韓国社会では馴染みのないものであるため、翻訳の問題が提起される。一般的に使われる用語で生活財と似た意味を持つことばとして、生活用品というものがある。すなわち、他の製品の生産ないしサービスを算出するために販売される商品を生産財というのに対して、衣食住と関連する消費財商品を生活用品というのである。しかし、家という空間に配置されるモノには、決して衣食住と関連する消費財商品のみが存在するというわけではない。各種の文章類と書籍、儀礼に関連があるモノも存在するものである。このような面において生活用品ということばは、生活財に比べて、限定された意味を持っている。よって家という空間に配置される全ての生活用品を生活財と理解する過程が必要である。

2 冷蔵庫の中の生活財を通じた生活文化研究¹⁾

京畿道城南市盆唐区書峴洞のあるアパートに住むインフォーマント李民貞(仮名)は、1953年に蔚山広域市で生まれ、高校までそこに住み、結婚後に城南市の旧市街地のアパートに住んだのち、盆唐新都市が開発されるにつれ現在の28坪型アパートに引っ越した。現在は、主婦業と兼ねて習字の指導を行っている。夫である金真燮(仮名)は、1945年に江原道襄陽郡で生まれ、主に江陵市で成長し、現在は会社員である。彼ら夫婦の間には1980年生まれの子が一人おり、現在大学生である。

この家の一ヶ月の平均収入は約360万ウォンであり、その中から月平均で210万ウォン程度が支出に消え、食料消費に支出する月平均の金額は約60万ウォンである(訳注:10ウォン=約1円)。よって全体の支出に対する食糧消費費は、約29%である。このようなエンゲル指数比率は、都市型中産層に属する。調査期間6日間の食料購入現況を表で整理すれば表1のようになる。

表1 城南市盆唐区の金真嬖一家における6日間の食料購入費の内訳

日	内訳 (単位: ウォン)	計
1	副食 (9.000), 副食 (8.360)	17.360
2	干しスケトウダラ (3.000), レタス (1.500), ダイコン (1.000), 生ワカメ (3.000), 海藻の和え物 (10.000), 魚類 (10.000), ナムル類 (6.000)	34.500
3	パン (3.000)	3.000
4	外食 (スンデクツ;12.000)	12.000
5	パン (3.700), 生ノリ (5.000), アイスクリーム等の間食 (9.000), 生ワカメ (1.000)	18.700
6	パン (4.000), タコ (13.000), 牛肉 (10.000), 餃子 (10.000)	37.000
総計		122.560

表2 城南市盆唐区の金真嬖家の冷蔵庫に入っている飲食物の内訳

区分	飲食物の種類
冷凍室	トゥギザァー・アイスクリーム 1箱, アイスクリーム・バー 2個, コーヒー粉 約70g, 冷麺用の麵 1袋 (約500g), 調味前のノリ 2袋, クロマメ 1袋 (約500g), アズキ 1袋 (約500g), 冷凍イカナゴ 20匹 (約1kg), 削りイワシ 約100g, 太めのイワシ 300g, 処理済みのホッケ 5~6匹, 干しスルメ 約10杯, 干しスケトウダラの千切 約100g, マメの葉 約1kg, 天麩羅用トウガラシ 約200g, カキ 1袋 (約200g), カルグクス用の麵 約500g, 牛肉 1斤, 干したダイコンの葉 約700g, キムチ 1kg
冷蔵室	キムチ類 → カクテキ 約300g, 白菜キムチ 約1kg 副食類 → 切干大根 約300g, 焼ノリ 少々, 焼きイワシ 約200g, キキョウの根の唐辛子粉あえ 少々, ピクルス 約1kg, 山菜の漬物 約1kg, キュウリの漬物 約500g, ニンニクの漬物 約400g 野菜類 → 白菜 約200g, モヤシ 約300g, タマネギ 少々, ダイコン 1本, キャベツ 1/2玉 調味料類 → ゴマ 約200g, ゴマ油 新品 約1kg, ケチャップ 約200g, マヨネーズ 微量, トウガラシ粉 約200g, 余った味噌, 煮干粉 約300g, 刻みニンニク 約50g, トウガラシ酢味噌 約300g, プルコギのタレ 約200g, 糸トウガラシ 少々 その他 → フラッペ用ゼリー 約200g, マツの実 微量, 薄皮つきの栗 100g, タマゴ 8個, コーヒー豆 300g, 練乳 約500g, 牛乳 約0.6l, ビール 2瓶, マーガリン 少々, イチゴジャム 100g, バター 新品 300g

大規模なアパート団地に住んでいるインフォーマントは、食材を購入する形態が三種類に分けられる。主にコメ・飲料・果物のように一度に買い溜めするものは、週末を利用して近隣の大型百貨店の食品売り場で購入する。しかし平日に少量の食材が必要な時には、アパートの商店街にあるスーパーマーケットで購入する。なお特別に調理する時間がない場合には、アパートの商店街の惣菜売り場に行き、完全に調理された惣菜を購入することもある。このようなことは、ふつう二週間に一度程度ある。大量に購入した食材は、主に冷蔵庫に保管する。表2は、調査期間にインフォーマントの冷蔵庫に入っていた食材を整理したものだ。

今日の韓国では、家庭用冷蔵庫が普及するに従って、かつての伝統的な食材ないし半加工飲食物の保管庫であった食器棚(찬장)がその機能を失い、冷蔵庫がその役割を担うようになっている。表2によっても分かるように、食材をすべて購入することに依存しているこの家の場合、一週間に一度のペースで大型百貨店の食品売り場で必要な飲食物を購入し、大部分を冷蔵庫に保管している。特に冷蔵庫の冷凍室には、長期間の貯蔵が可能な食材を保管するのに対し、冷蔵室には主におかず類を保管する。冷蔵室の中身は主としてキムチ類と副食類であるが、ゴマ・ゴマ油・ケチャップ・マヨネーズ・唐辛子粉・プルコギのタレ・千切トウガラシなどとともに、常温でも十分に貯蔵が可能なものも冷蔵庫に入れて鮮度を保たねばならないものと信じられている。

これは、西欧の冷蔵庫が主として冷凍室に比重を置いて構成されている反面、韓国の冷蔵庫が冷蔵室に比重を置いて構成されているところにも理由があるが、米飯を中心とし多くの種類の副食で成り立った韓国食の構造が冷蔵室を絶対的な位置に置く理由となったのである。特にこの家のように、夫婦が共稼ぎをし、子どもが一人である都市の夫婦家族の場合、食材の購入と調理に多くの時間を費やさないため、更に冷蔵庫に多くの食材が入ることとなる。

なおこの家では冷蔵庫の他にも食材がシンク台の食器棚やベランダにも置かれており、その内容は次の表の通りだ。

ここで、金真燮家の冷蔵庫と家の中の各所にある飲食物の種類と内容を通じて、この家の日常的な食事構造を予測することが出来る。主に韓国食を作る上で必ず必要となる調味料(양념)類が冷蔵庫の冷蔵室に保管される。副食(밑반찬)類・汁物・鍋類が日常の食事の種類となる可能性が多い。現地調査を通じて確認したところによれば、この家の主食は米飯である。

表3 城南市盆唐区金の真燮家の食器棚等に入っている飲食物の内訳

区分	飲食物の種類
冷蔵庫横の食器棚	調味済みのノリ 新品 1袋, 米菓子 約20個, 緑茶ティーバッグ 約20袋
ガスレンジ横の食器棚	イチゴジャム 新品 800g, トウガラシ塩 約1kg, コーヒー用粉末乳 新品 2袋(2kg), ダイズ 約500g, 砂糖 約1.5kg, 使いさしのコーヒー用粉末乳 200g, 胡椒 少々, 余った味塩 少々, ワイン 約1kg, コニャック 新品 1瓶, 使いさしのインスタント・コーヒー 約400kg, 小分けにしたインスタント・コーヒー, 砂糖, コーヒー用粉末乳, 米(食器棚の下) 約10kg
ガスレンジ下の食器棚	水飴 約1kg, ゴマ油 微量, コーン油 500g, 料理酒(ミリン) 約4kg, コーン食用油 約800g, 濃口醤油 新品 1.8l, 使いさしの濃口醤油 微量, 薄口醤油 1kg, 食用油 新品 2瓶(約1kg), だしの素 約700g, インスタント・クリームスープ粉 約300g, 味塩 約300g, 脱脂粉乳 約1kg, 玄米ヨモギ米 約2kg
ベランダ	市販の醤油およびコチュジャン(トウガラシ味噌) 各約2kg, リンゴ 12個, メロン 1玉, サツマイモ 約1kg, 挽きたてのトウガラシ粉 約1kg

特別なことがない限り、朝食と夕食の主食は米飯だ。主に食べる汁物は、大根の味噌汁と牛肉のワカメスープとなる。副食としては、白菜キムチ・若大根キムチ(송각무김치)・生野菜(サンチュ・白菜・レタスなど)・切干大根・キキョウの根の唐辛子粉あえのような野菜類と、ホッケ(임연수)の焼きもの・干し太刀魚の煮魚・タラの干物のコチュジャン煮・牛肉の醤油煮などだ。特に、この家の家長は江陵出身であるため、海藻のあえ物であるムカデノリ(지렁이리)・海苔のあえ物・ワカメのナムルなどがおかずとして好まれている。ふだん昼食は家で食べる者がおらず、休日の食卓にはカタクチワシの煮干の汁物にマンクス(만 국수: 温麺の一種)がよく上る。

だが伝統食が主に消費されていると言っても、この家の飲食消費の構造が典型的な韓国食であると見ることは難しい。すなわちこの家の食材購入は、徹底的に商店街と百貨店を通して行われる。盆唐区に隣接した牡丹市場のような在来市場で食材を購入することも出来るが、そうはしていない。なぜなら家で調理する食べ物はほとんどが簡単なものであり、長期間の保存が利く食べ物は主に食品会社で生産されたものを買って食べているからである。韓国人の主なおかずであるキムチも、この家では購入して食べており、料理の基本となる醤油や味噌やコチュジャンもすべて買ったものを使っている。このような理由から、長期貯蔵食を貯蔵すべき専門空間である甕置き台(장독대)ないし甕(장독)がこの家には存在しない。一般的にアパート生活をする韓国の家庭でも、これらの貯蔵食品を保管するための甕が1~2個あるという事実とは異なっている。なお最近に開発されたキムチ冷蔵庫もこの家にはない。それほど長期貯蔵用の食べ物を自ら作らないのである。

反面でケチャップ・マヨネーズ・バター・イチゴジャムなどのような西欧の調味料も、冷蔵庫には必ず常備されている。韓国的な食事をしながらも、同時にこれらの材料が必要なサンドイッチやチャーハンなども特別食としてそれほどまでに作られているのである。コーヒーはこの家の飲み物としてもっとも愛飲されている飲み物だ。たとえ緑茶のティーバッグが準備されていようと、それは来客を接待するために使われる。主に飲み物としてコーヒーを飲む主婦李民貞の好みによるインスタント・コーヒーと挽いたコーヒーの粉は、常備されている。

この家に見る特異な点は、調理器具と食具が暮らしの規模に比べて多種多様であることだ。これは今日に販売されている調理器具が韓国型アパートに適合するように構成されているということではなく、西欧型の調理器具が主流を占めているためのことだ。例えばフライパンが中型4個に小型2個と総計6個にもなる。だが主として使用するのは中型の二つである。残りは主婦の購買欲求により求められた。電子レンジと食器洗い機などの家電製品もまた、あまり使われることがない。ただアパート生活において必ず揃えなければならないものと認識し、購買に走ったのである。だが食具である御飯茶碗とスプーンおよび箸は、使用者別に自分のものがあり、これは所有権が明らかに現れてい

る。なお床に座り食事をするための台盤(교자상)がない。これは、この家が来客を迎えることが少ないということを示唆している。特に兄弟関係で長男ではないために大規模の祭祀やパーティが家で行われないという点から、台盤の必要は特にはない。

このように西欧型の空間と社会システムに置かれているこの家も、日常的な食事は典型的な韓国食で維持されている。しかも外食の場合にも海鮮鍋(해물탕)やスンデ・クク(순대국:豚の腸詰の汁物)のような韓国型に偏っている。この点は、この家の夫婦の歳が50台と、保守的な性向を呈しているためだ。このような面で西欧式の外面的空間の中で人々の生活は未だに韓国型を保っていることを確認することが出来る。ただ、パンを好んで食べる点や、コーヒー・洋酒・ワインのような飲み物と酒類については西欧型を辿っているという点は、今日の都市型韓国人の変化する飲食消費形態を物語る良い事例となる。

3 韓国での生活財調査の必要性

上述したように筆者は、冷蔵庫と周辺の飲食物を通じ、韓国の都市型アパートに居住する50代夫婦の家族が持つ飲食消費の一つの断面を明らかにした。我われが今日議論しようとしている現代韓国社会における生活文化の研究に生活財生態学に基づいた生活財調査がいかに効果的な方法となるかも、点検してみることができた。

韓国における生活文化についての従来の研究は、社会学的な計量研究に集中してきた。特に長期的に政府統計庁で「人口住宅総合調査」、「社会統計調査」、「社会指標調査」などの計量的な調査を行っているが、具体的に韓国人の生活文化がどのように構成されるかという深層的なアプローチを行うことは出来ていない。以下で社会統計調査で主に行う計量的な調査項目を見れば、この調査が政府の政策樹立のための目的を持っていたことが分かる。

- 家族：老後準備方法，老父母の扶養に関する態度など
- 所得・消費：所得満足度，消費生活満足度，緊縮消費支出項目など
- 教育：子女教育の目的，教育機会未充足理由など
- 保健：健康管理方法，医療サービスについての満足度および不満理由など
- 住居・交通：希望する住宅形態，通勤通学の所要時間など
- 情報・通信：情報通信機器保有，パソコン使用能力，使用用途，使用時間など
- 環境：農薬汚染に関する不満，環境汚染レベル評価など
- 文化・余暇：新聞の講読頻度および関心分野，余暇活用方法，テレビ視聴時間など
- 安全：犯罪被害に対する不安度，夜間歩行時の安全度など
- 社会参与：主観的階級意識，社会問題に対する見解，社会的移動に対する理解など

反面、韓国消費者保護院と連携したインターネット・サイト「ショッピング・インフォネット」で分類している商品分類は、上のようなテーマ分類とは違っている。主に生活用品を中心に最近多く販売されているものから順に分類を行っている¹²⁾。生活財調査の分類でこの内容を使用するには無理があるが、これは今日の韓国社会の生活財がどのように構成されているかを調べるのにも役立つだろう。

- コンピュータ：デスクトップ，PC，ノートブックなど
- 家電：洗濯機，冷蔵庫，テレビなど
- 通信・事務機器：電話機，携帯電話，コピー機，ファックスなど
- 図書・レコード・映像物：本，DVD，ビデオなど
- チケット・商品券：チケット，商品券など
- 化粧品：女性用，男性用，香水など
- レジャー・スポーツ用品：ゴルフ用品，自転車など
- 自動車：各種車両，カーインテリアなど
- 美容・健康用品：医療補助器，指圧器，医薬品など
- 事務用品・文具：コピー機，筆記具など
- 衣類・雑貨：衣類，靴，時計など
- 出産・育児・児童：妊婦服，おむつ，乳母車など
- 家具・生活用品：生活家具，台所用品，浴室用品など
- 食品：菓子，農畜産物，加工食品など
- その他：花，ペット用品など

周知のとおり日本の生活財生態学調査は、商品やサービスについて使用者の立場から研究・調査・テストすることにより、使用者の要求を生産者に伝達するという目的のもと、食品科学研究所が中心となって行われてきた。これは、社会的なトレンドがどのような傾向を持って変化するかといふ問題意識から出発したもので、商品の企画と生産の段階から消費者の要求が反映されるようにするというところに一役買った。同時に、生活文化研究者には具体的な物的資料を提供した。これをもとに現代の日本人の生活文化を注視する作業は、まるで現代版考古学のようなものとなっている。

しかし韓国では、国内の学者が主導するもつでこのような方法の生活財調査が施行されたことはない。ただ、家庭で使われる電気製品を生産する企業で韓国型家電製品を生産するためこれと類似した研究が行われたことはある。1990年代初に韓国型冷蔵庫や掃除機などを開発した LG 電子の場合、アパートの室内を社内に設置し、研究員たちが日常的なアパート生活をしながら、自社の電子製品の実生活への適用過程を研究したこと

がある。しかし、このようなケースは一時的なもので終わってしまった。特に彼（女）らが意図したことは、外国で開発された生活用品を韓国人の生活方式に合わせて調整する作業であって、生活財のトレンドについての総合的な調査ではなかった。

更に生活文化と密接な関連を持つ衣食住についての食品学・服飾学・建築学からの研究は、主に伝統的な傾向性に対する研究と新しい開発のための研究に集中し、生活文化の現象にはほとんどアプローチを図れていない。特に生活文化の中心軸を成す衣食住に関連した学問が元来には家庭学部を含む形で開設されていたが、実際のところ、これらは学際的に総合的な共同研究よりも独自の研究に集中してきたということも、日本とは背景が違っている。よって社会学では政府の政策樹立のためのマクロな計量研究を主とし、食品学・服飾学・建築学からは、各自の違った学問的傾向性のために、これらを統合する生活文化に関する学問的な調査研究が不可能であった。

2000年10月に日本の国立民族学博物館が企画した韓日生活文化交流展の準備のため、韓国側における調査研究のパートナーとして組織された「チブ研究会(집연구회)」は、従来なら個別的であった生活文化に対するアプローチを総体的に遂行するため、研究者の構成を多彩にすることを目標に置いた。文化人類学を核的な学問に設定し、各々が飲食・服・建築・家族・信仰・儀礼などを研究する研究者で研究会を組織した。当初には日本の生活財生態学についての理解を基礎とし、「生活文化研究会」ないし「生活財研究会」のような名称で研究会を構成しようとしたが、各々の用語が持つ型にはまったニュアンスのために、これらは採択されなかった。結局韓国語の「チブ」が生活文化の実践的な空間だということに注目し、これを研究会の名称に決めた。上記でも明らかとしたように、「チブ」は住居(housing)という建築物とその構成員を示す世帯集団(household)、そしてその中で人々が行う活動を包括的に扱うことが出来る日常的な用語だ。このような面で、文化の行為者の立場から駆使される日常的な用語を学術的な用語に格上げする意味でも、「チブ研究会」の名称は効果的でありうると判断した。従って「チブ研究会」は、韓国を中心にして「人+空間+モノ」が持つ相互関係を文化的に研究する集まりである。

三枝佐枝子は『生活財生態学Ⅲ』の序文で「どのくらいのもが家庭にあり、それが果たして有用に使用されているかどうか。そこに隠れている人間とものとの関係がどのようなものか。ものが置かれている家庭景観はどのようなものかを綿密に調査研究してきた」ことが日本の生活財生態学の調査研究目標だとしている。このような意味で、「チブ研究会」の研究はチブという空間に置かれたものを調査し、それが使用者との間に持つ文化的意味を明らかにするところにあるため、韓国版の生活財生態学を研究する集まりだと言っても過言ではない。

しかし「チブ研究会」は、去る一年余りの間、このような重要性を各々が違った学問的志向性の中で合致させるのに多くの時間を費やしてきた。初期には日本の生活財生態

学についての理解のために会を進め、その後には各自の専攻から見る生活財生態学の可能性について討議を行った。これをもとに部分的に生活財調査を行ったこともある。

これが基礎となり、2001年5月に韓国文化人類学会の全国大会では「チブと文化」という文化を別途に組織し、パネル発表をして韓国の文化人類学者たちに多くの関心と支持を受けた。この日に発表された論文は次の通りである。「文化としての住居研究の考察」（李熙奉）、「チブと飲食行為の相関性に関する研究」（周永河）、「住居空間による衣生活の様相——韓屋とアパートでの室内着類の着用様式の変化を中心に」（池倫映）、「アパートに具現される宗教性」（呉文仙）。

しかし、全面的な生活財調査を通じた研究が施行されなかったために、幾つかの現象について文化的な解釈をしようという傾向が発表論文全体で目についた。なおアパートという同一の形態の住居空間を発表者たちが選定したように見えるが、実際には各自が違った内容のアパート世帯集団を選定したという面も問題となった。従って特定の都市の選定と一定の経済水準、類似した世帯集団の構成などのような基準が必要となる。そして類似した類型と相違する類型を比較する作業も要求される。

今日の韓国社会は、近代を超え、西欧型の生活文化が支配的である。特に2000年に入り、韓国人の住宅全体の中でアパートが占める割合は47.7%に及ぶ。更にアパートをはじめとして集合住宅と多世帯住宅のような西洋型の密閉された住居空間が全体の59.2%に上がっている¹³⁾。伝統的に韓国の住宅は開放型となっている。部屋(방)は密閉型であるが、板の間(마루)・庭(마당)・甕置き台(장독대)などは開放型だった。開放型が密閉型に変わるとともに伝統的な空間認識が変わっていき、カメ・洗面台・竈などというものは、消え去り、あるいは残存物の形に変形していった。モノと空間の変化は、人々の生活様式と認識を変える可能性が高い。

従って古いモノが新しい空間でどのように変異し適応するかという問題は、現代韓国人の生活文化を理解する上で必ずや要求される作業だ。民俗学は、近代的学問であるが、前近代について主に関心を向けてきた。前近代の理解に基づき、前近代から近代への変異過程において古い慣習がどのように変異してきたかを明らかにする作業は、民俗学という学問が今日に遂行しなければならない重要な研究項目である。このような面から生活財生態学の方法を受容するなら、韓国人の生活文化が前近代的な様式から近代的な様式へと変異する時に現れる具体的な過程を眺望でき、これを通じて韓国人が持つ文化的なコードをはっきりとさせることが出来る。

4 韓国版生活財保有調査票の方向について

韓国での本格的な生活財生態学研究にあたっては、先に韓国版の生活財保有調査票を作成する必要がある。既に今回の展示のため佐藤浩司先生が李源台邸のモノを精密に調

査しているが、この調査結果は韓国版の調査票を作成する上での基本資料となりうる。なお日本では(株)CDIによって生活財保有調査票が作成されている。だが佐藤浩司先生の作業とCDIの調査票は、若干で異なった分類システムを見せている。CDIの調査票は、玄関用品を除けばすべての分類項目が家具・冷暖房機具・台所用家具などのように用途別になっている。これに比べ佐藤浩司先生の作業では、家族構成員の個々人による分類とともに、玄関・トイレ・居室などのように空間が基準となった分類が成されている。

調査者の立場では、用途を基準にして調査票を作成する場合、生活文化を分析する上で有用な情報をストレートに得ることが出来て良い。しかし被調査者の立場では、自分の家にあるものをどれほど記憶しているかがポイントとなることがある。このような面で、空間別に調査をする方法は被調査者の立場から言って遥かに便利なものである。日本の生活財保有調査票が用途別に作成されたところには文化的側面が反映されているのではないかという点に関心を呼ぶ。もちろんモノが商品である場合でも、家庭内で配置される時には使用者の立場で最も優先視するのは、その用途であるはずだ。しかし韓国の場合には、モノ自身の細かい用途よりも使用者の空間利用とモノの配置が、より意味を持つ可能性が高い。

前述した金真燮氏の事例で見たように、韓国の都市型アパートで冷蔵庫は実際の飲食物の冷凍と冷蔵という用途を越えて、飲食物の保管空間として理解されることもある。特に冷蔵と冷凍の選択は、多分に使用者の選択によっていることも多い。一般的に冷蔵庫に置かれたものは、必ず冷蔵しなければならない冷蔵食品はもちろんのこと、トウガラシ粉・煮干し・乾燥ワカメのような常温で保管してもよいものが入ったりもする。特に日本の生活財保有調査票で分類が自家製保存食品・自家製冷凍食品・缶詰食品・瓶詰食品・インスタント食品・冷凍食品・加工食品・調理食品・穀類・魚介食品・油脂と調味料・菓子類・薬用健康自然食品などの区分が、韓国人の使用者にどのくらい厳格に区分されうるかも疑問だ。

別の例としてまた、韓国のアパートの浴室を挙げることが出来る。一般的にトイレと浴室は同じ空間に配置される。この場合には使用者の立場により、同じ空間が浴室とかトイレとか各々呼ばれる。日本の生活財保有調査票では、トイレ用品・浴室用品・歯磨き粉とシャンプー類・洗面用品・タオルなどが区分されているが、韓国人の場合このような区分が生活文化を理解する上でどれほどの助けになりうるのか分からない。李源台邸のトイレにあるモノの目録を見ても、このような点を容易に理解できる。便器を中心にトイレ用品があるが、便器の貯水タンクの上にはシャンプー・歯ブラシなどがあり、ひいては洗濯用品と掃除用品もトイレの中に置かれている。言わば韓国のアパートのトイレは、便所・洗面・沐浴・洗濯用品の保管(李源台邸の場合には洗濯機が台所にある)、掃除用品の保管などのように多用途に使われもしている。

従って韓国版の生活財保有調査票の作成には、まず空間を上位に置いて、用途を下位

に置く文化的分類が必要である。特に1970年代から建築された韓国の都市型アパートは、時代的流行と要求に従ってその形態を変えるため、空間の変化が比較的多いものである。例えば、〈部屋3+台所1+浴室2+玄関〉という構造においても、多用途室の有無・ベランダの広さ・浴室の構成などが、時代別・施工業者別に少しずつ違っている。これが日本のように一定の枠組みとなった共同住宅と違っている点である。このような意味からも、人を中心に置いた空間を上位に置く分類法が韓国では有用でありうるわけである。

だが、空間中心の生活財保有調査票だけでは、各々の生活財が持つ用途を明らかにする上で、問題が生じざるをえない。日本の生活財保有調査票の場合、各々の生活財に購入意欲、すなわち新しいモノを買う意志を明らかとする指標と使用頻度を表で表示しているが、ここに用途も表示するようにするという方式を採択すれば、この問題を解決できるだろう。よって韓国版の生活財保有調査票の大分類は空間、中分類は用途別、そして数量は小分類という方法を採択すればよいと思われる。例えばテーブル・クロスの場合には、「KI1404」となるが、「KI」は食堂、「14」は食卓用品、「01」は食堂にある生活財の数量という目録となる。具体的な例は次のようになる。

例) 項目分類

KI: 空間, 14: 用途別, 01: 生活財目録

KI1401 テーブル・クロス ある () ない (), 買い換え計画 (○, △, ×)
用途 (), 使用者 ()
生活財の経緯購入, 時期 (), 贈物, 時期 ()

韓国版の生活財保有調査票の大分類である空間の区分は、次のように文字で表記する方法が有用だ。これは空間の識別にも役立ち、アパートではない単独住宅（一戸建て住宅）の場合に空間が追加されても混乱が生じないだろう。アパートの場合には次にように分類できる。

例) 大分類

MM: 空間

- LO 廊下: アパートの廊下にも甕や自転車などが置かれている場合がある。
- EN 玄関: 門から居室ないし厨房までの空間。
- VM ベランダ1: 居室と繋がっているベランダ。
- VS ベランダ2: 部屋と繋がっているベランダ。ただしない場合もある。
- ST 倉庫: ベランダの付属空間として設置されている場合もある。
- MM 多用途室1: 主に洗濯室として使用される。
- MS 多用途室2: 洗濯室以外に室内に倉庫が位置することもある。ない場合もある。

- BA 浴室（トイレ）：主に使用する浴室でトイレと兼用。
T0 トイレ（浴室）：主寝室に付属したトイレでシャワーだけ出来る構成。
KI 厨房：シンク・調理台・ガスレンジで構成された空間。
DI 食堂：洋式テーブルの空間。ただし食事以外の空間として使われる場合もある。
RE 冷蔵庫：一般の冷蔵庫にキムチ冷蔵庫を含む。
LI 居室：ソファとテレビが置かれた空間。
R1 部屋1：主寝室に該当し可能な限り使用者の名前を部屋の名称にする必要がある。
R2 部屋2：子ども部屋に使われる空間であるが使用者の名前が必要。
R3 部屋3：子ども部屋に使われる空間であるが使用者の名前が必要。

分類の最後で一工夫を要する項目は、中分類に該当する用途別区分である。（株）CDIが作った日本の生活財保有調査票を参考に、筆者が韓国版の用途別中分類を作成してみた。始めに付いた番号は、中分類の基準となる。また右には日本の生活財保有調査票との比較を試みた。

- 01 家具
- 02 装飾用品
- 03 照明・防犯・防災用品
- 04 冷暖房機具
- 05 台所用家具（冷蔵庫を含む）
- 06 ガスレンジ・調理台・ガスレンジの小道具
- 07 釜・フライパン・ヤカン → フライパンを追加
- 08 電気・ガス器具
- 09 モノを入れる器
- 10 調理用小道具
- 11 コーヒー・茶器
- 12 食卓用品
- 13 包丁類
- 14 子ども用の食器
- 15 韓国式の食器
- 16 西洋式の食器
- 17 その他の食器 → 韓国式でも西洋式でもないもの
- 18 箸・匙・スプーン・フォーク・ナイフ → 箸と匙を追加
- 19 コップ類
- 20 レジャー用の食器
- 21 自家製貯蔵食品（副食） → 日本の場合、自家製保存食品が冷凍食品に分類

- 22 購入した貯蔵食品（副食） → 塩辛類などが含まれる
- 23 缶詰・瓶詰食品
- 24 インスタント食品
- 25 冷凍食品
- 26 加工食品
- 27 調理食品
- 28 穀類
- 29 肉類 → 日本の場合ない
- 30 魚類（乾物を含む）
- 31 スパイス類 → 日本の場合ない
- 32 油脂・調味料
- 33 飲料・酒類 → 日本の場合には飲料に含まれる
- 34 菓子類
- 35 薬用健康食品
- 36 学校関係衣類
- 37 男性用衣類（洋服）
- 38 男性用衣類（韓服） → 日本の場合ない
- 39 男性用靴・帽子・衣類雑貨
- 40 男性用外出用品（身分証などを含む）
- 41 女性用衣類（洋服）
- 42 女性用衣類（韓服）
- 43 女性用靴・帽子・衣類雑貨
- 44 女性用外出用品（身分証などを含む）
- 45 旅行用品
- 46 男子用衣類
- 47 女子用衣類
- 48 乳幼児用品
- 49 その他の靴・傘類 → 日本の場合には玄関用品とされる
- 50 寝具
- 51 洗濯用品
- 52 裁縫用品
- 53 掃除用品
- 54 トイレ用品
- 55 浴室用品
- 56 石鹸・シャンプー

- 57 洗面用品
- 58 タオル類
- 59 理髪・頭髪用化粧品類
- 60 化粧品類（化粧紙を含む） → 化粧紙を追加
- 61 美容・運動用器具（自転車などを含む） → 日本の場合には自転車は移動用
- 62 医療用品（薬を含む）
- 63 新聞・雑誌・書籍
- 64 文具・事務用品・学用品
- 65 玩具
- 66 娯楽器具
- 67 テレビ・ビデオ用品 → 別途項目に分類
- 68 オーディオ用品
- 69 カメラ用品
- 70 コンピュータ用品 → 別途項目に分類
- 71 通信用品 → 別途項目に分類. 日本の場合には玄関用品である
- 72 楽器用品
- 73 修繕用品 → 日本の場合には日曜大工用品に分類される
- 74 趣味用品
- 75 園芸・ペット用品
- 76 自動車用品（オートバイなどを含む）
- 77 親戚関連用品（族譜・文書・手紙などを含む） → 日本の場合ない
- 78 宗教・儀礼用品
- 79 蒐集物
- 80 その他

5 おわりに

筆者は上述したように韓国版の生活財保有調査票の大分類と中分類の例を提示した。だがこれは、アパートという共同住宅の家を対照にした調査票に過ぎない。なお、実際には小分類の細部生活財目録が抜けているため、完成されたものとは言えない。おそらく実際の調査にあたっては更に多くの細部分類が必要となるだろう。特に佐藤浩司先生の李源台邸での作業で作られたモノの目録を基調とすれば、ひとまず初歩的に完成された韓国版生活財保有調査票を作成できるだろう。

実のところ分類というものは、一定の価値観が介入するものである。特に国別に生活財保有調査票を作成するならば、それ自体が文化の比較研究において良い資料となる。

上記の用途別分類によっても分かるように、日本の生活財分類と韓国のものとは一定の差異が見られる。例えば日本の場合には「自家製保存食品」と「冷凍食品」に区分できるものが、韓国の場合では「自家製貯蔵食品」と「市販の貯蔵食品」が主流となる。これは韓国人が貯蔵食品を重要視するという点を反映している。また「親戚関連用品」は、家柄によって差が見られるが、一般的に族譜・文書・手紙などを保管している場合が多い。これは韓国人の家庭生活において親戚関係が持つ重要性を示している。特に親戚関連文書には、祭祀日程・誕生日などのような記念日を記した文書も含まれる。このような意味で調査票の作成は、文化の表現だということが出来る。

ところが他の意味においては、日本の生活財保有調査票と韓国版は相当に類似している。現代の都市における生活がグローバル・ヴィレッジ化する傾向が、ここには反映されているのである。このような意味でも、中国の都市居住者の家までも含んだ東アジアの現代生活についての生活財生態学の調査は、東アジア文化圏の相違と相似を確認できる意味深い民族学的で比較民俗学的な作業だと考えられる。

同時に、日本で提起された生活財生態学が現在の意味を持って生活に使われるモノの種類と意味を探究することに集中している一方で、韓国の場合にはこれを通じて旧来の習慣がどのように変異しているのかにより重点が置かれる可能性が高い。すなわち、生活財調査を通した生活文化の研究は、通時的な側面において伝統の変異過程を研究することと、共時的な側面において現代韓国人の生活文化を理解することに、重要な方法論的提案となりうるものである。

注

- 1) 노명환 「地域학의 概念과 方法論 —— 日常生活文化史를 中心으로」, 韓國外國語大學校 外國學綜合研究센터 『國際地域研究』 第3卷第1号, 1999: 12 から再引用。
- 2) 박부진 「居住空間의 利用慣行과 家族關係」, 『性, 家族, 그리고 文化人類學的接近』, 서울: 집문당, 1998: 133-162.
- 3) 박부진 「家族의 位階構造와 家族關係」 『家族과 文化』 第10輯 2号, 1998: 20.
- 4) Rosaldo, Michelle, "Women, Culture and Society: A Theoretical Overview," Michelle Z. Rosaldo and Louise Lamphere (eds.) *Women, Culture and Society* pp.17-42, Stanford: Stanford University Press, 1974: 23.
- 5) 英語では home economics (アメリカ) ないし domestic science (イギリス) という。20世紀初に生じたことばである。このことばが日本を通して家政学と翻訳され、現在に至っている。
- 6) ソウルの漢陽大學校生活科學大學の教育目標を見れば、一般的に生活科學が意味するところを理解できる。「現代および未來社會で要求される衣・食・住の分野の有能な専門家の養成のため、各分野の理論と技術を習得させ、未來の多様な環境に對處できる職業人としての能力を育むことにある。このため、人間生活の直接的・間接的な環境、すなわち衣生活・食生活・住生活と社會環境との關係を研究し探索する」。
- 7) 張哲秀 『韓國 民俗學의 体系的 接近』, 서울: 民俗苑, 2000: 46-47.

- 8) Tylor, Edward B. *Anthropology* (Abridged by Leslie A. White), Michigan: The University of Michigan Press, 1960: 79.
- 9) 吉田集而(編)『生活技術の人類学』, 東京: 平凡社, 1995: 8.
- 10) 全京秀「衣食住와 道具」, 『韓國의 鄉村民俗誌 (III) —— 仁川廣域市 江華郡篇』, 城南: 韓國精神文化研究院, 1996: 103-175.
- 11) 筆者は2000年3月から12月までソウルと京畿道一帶の飲食民俗に関する現地調査を試みたことがある。具体的な内容は、周永河「京畿北部의 食生活」, 「京畿東部の 食生活」, 『京畿民俗誌』(IV衣食住編), 京畿道博物館, 2001: 236-344を参考されたい。
- 12) <http://price.cpb.or.kr>を参照。
- 13) 統計庁『2001 韓國の社会指標』, 大田: 統計庁, 2001: 326。「建築年度および住宅形態別の住宅分布」調査によれば、1990年には全国の住宅の中で単独住宅が66%, アパートが22.7%, 1995年には全国の住宅の中で単独住宅が47.1%, アパートが37.5%だった。

文 献

吉田集而編

1995 『生活技術の人類学』, 東京: 平凡社。

노명환

1999 「地域学の 概念과 方法論 —— 日常生活文化史를 中心으로」, 韓國外国語大学校 外国学総合研究센터『國際地域研究』3 (1)。

統計庁

2001 『2001 韓國의 社会指標』, 大田: 統計庁。

박부진

1998 「家族의 位階構造와 空間利用」, 韓國家族学会『家族과 文化』10 (2)。

1998 「家族空間의 利用慣行과 家族關係」, 『性, 家族, 그리고 文化人類学的接近』서울: 集文堂。

商品科學研究所

1993 『生活財生態學III』, 東京: 商品科學研究所+CDI。

張哲秀

2000 『韓国民俗学の 体系的接近』, 서울: 民俗苑。

全京秀

1996 「衣食住와 道具」, 『韓國의 鄉村民俗誌 (III) —— 仁川廣域市 江華郡篇』城南: 韓國精神文化研究院。

周永河

2001 「京畿東部の 食生活」『京畿民俗誌』(IV衣・食・住篇), 龍仁: 京畿道博物館。

2002 「食口論 —— 現代韓國社会에서의 飲食慣習」, 『精神文化研究』25 (1), 城南: 韓國精神文化研究院。

Rosaldo, Michelle

1974 *Women, Culture and Society: A Theoretical Overview*, In Michelle Z. Rosaldo and Louise Lamphere (eds.) *Women, Culture and Society*, pp.17-42. Stanford: Stanford University Press.

Tylor, Edward B.

1960 *Anthropology* (Abridged by Leslie A. White), Michigan: The University of Michigan Press.

한국에서의 생활문화 연구와 생활재생태학

주 영하

1 들어가는 말

독일의 일상생활사 연구자 중 한 사람인 보르샤이트 (Borsheid) 는 일상생활 (everyday life) 을 의·식·주처럼 가장 기본적이고 물질적인 삶의 형태로서 매일 매일 반복되고 장기적으로 지속되는 습관화된 삶으로 정의한다. 그에 따르면 반복성과 지속성이라는 특징을 가지고 있는 일상생활은 습관화라는 삶의 방식에 의거하여 안정과 평온을 유지시켜 주는 삶의 장이다. 이것은 독립된 생활 단위로서 일정한 틀에 박혀 있는 것은 아니지만 사람들이 새로운 것에 접하게 됨으로써 야기되는 충격과 이에 따른 긴장과 갈등을 해소시켜 주는 안정된 삶의 장이기도 하다¹⁾.

보르샤이트가 말한 일상생활이란 다른 말로 하면 의식주를 중심으로 한 일상적인 삶이 영위되는 ‘집’ 이란 공간에서 일어나는 문화적 행위를 가리킨다. 공간으로서의 집은 사람들의 일상적인 행위가 일어나는 곳이기 때문이다. 주지하듯이 ‘집’ 이란 말은 대체로 두 가지의 의미를 지니고 있다. 먼저 추위·더위·비바람 따위를 막으려고 지은 물리적 구조물을 가리킬 때 집이란 말이 쓰인다. 다른 의미에서 집은 사람들이 이루는 가장 최소한의 사회조직인 가족이 생활하는 공간이다. 따라서 ‘집’ 은 가족을 담고 있는 단순한 물리적 구조물일 뿐만 아니라, 가족이 속해 있는 문화의 다양한 모습을 반영해주는 문화적 공간이다²⁾. 즉 ‘집’ 이란 말에는 살림집 (housing) 이란 건축물과 그 구성원을 가리키는 가구집단 (household) 이라는 의미가 동시에 담겨 있다. 사람의 행위는 공간 속에서 이루어지며, 공간은 현실적 실체이면서 상상 속에 존재하는 것이고 상징적 은유적 개념으로 구성된 것이다³⁾. 곧 문화적 산물 (cultural artifact) 과 문화 (culture) 를 하나의 공간 속에 둘 경우 물리적이면서 문화적인 공간인 집에서 일어나는 가구집단의 행위가 지닌 의미를 더욱 실제에 가깝게 접근할 수 있다.

이런 의미에서 ‘집’ 이란 공간에서 일어나는 사람들의 행위는 넓은 의미에서는 일상적인 삶이 주축을 이루지만, 다른 한편에서는 가구집단이 중심이 되는 각종 의례적인 행위까지를 포괄한다. 비록 집이란 공간은 그것보다 넓은 범위인 공적 영역과는 구별되는 사적 영역으로만 규정되기도 하지만⁴⁾, 그렇다고 사적 영역에서 행해지는 모든 활동이 단지 비공식적인 의미만을 지니고 있지는 않다. 역사적 단계에 따라 집이란 공간이 각종 생산 활동의 단위로서 지닌 기능을 공적 영역에 이전시켜온 것은 사실이지만, 그렇다고 오늘날과 같은 후기 자본주의 사회에서

집이란 공간이 단지 휴식을 위한 비의례적이고 비정치적인 영역에 지나지 않는 것은 아니다. 사적 영역이 공적 영역이 지향하는 바와 상호 연결되어 있다는 점을 인정한다면 집이란 공간에서 일어나는 행위는 비록 일상적이거나 의례적이거나를 떠나서 일정하게 사회적이고 정치적인 의미 체계 속에서 작용을 하는 경우도 많다.

일반적으로 집을 중심으로 일어나는 일들을 학문적으로 접근하는 학문분야를 가정학(家庭學 혹은 家政學)⁵⁾이라고 불러온다. 그러나 오늘날 가정학과 혹은 가정대학은 한국의 대부분 대학에서 사라지고, 그 대신에 생활과학대학이라는 표현이 많이 쓰인다⁶⁾. 하지만 주로 의식주를 대상으로 하고 있는 바는 가정대학 때와 큰 변화가 없다. 그러나 생활과학이 의미하는 바는 실제로 집이란 공간에서 일어나는 일보다는 공적영역에서 흡수한 의식주 부분에 중점을 두고 기술적으로 접근하는 경향이 강하다. 이런 의미에서 사람들의 일상생활이 영위되는 집이란 공간 내에서 일어나는 행위에 대한 생활과학에서의 연구는 기왕의 가정학을 대체하기는 어렵다.

사실 최근 한국 민속학계에서 논의되는 생활사 혹은 생활문화에 대한 접근은 다분히 일상생활에 대한 관심에서 대두된 것이다. 가령 일정한 시공간(時空間)에 놓인 인간의 일상적인 삶을 생활문화라고 규정하고, 한국 사람이 이 땅에 살면서 겪는 생활체험을 어떻게 역사적으로 범주화시켜 관습적 태도로 체계화시켰는가를 밝히는 것이 한국 민속학의 과제라고 강조하기도 한다⁷⁾. 이런 면에서 인간의 최소 집단인 가구집단이 생활을 유지하는 집이란 공간과 생활문화의 연구는 민속학 연구에서도 가장 기본이 되는 분야라 하겠다. 그러나 종래 한국 민속학에서 접근해온 의식주 중심의 생활문화에 대한 연구는 분야사(分野史)의 경향을 다분히 지닌다. 가령 식생활사, 복식사, 주생활사와 같은 연구가 마치 민속학의 생활문화 연구인 것으로 착각하는 경우도 있다. 이런 면에서 한국 민속학에서의 생활문화에 대한 이해는 아직 더 개념적인 작업이 요구된다.

일찌기 인류학자 타일러는 그의 책 *Anthropology* 에서 인간이 도구를 사용한다는 측면에서 다른 동물과 다르며, 도구의 사용은 인간이 스스로를 유지하고 지탱하는 데 필요한 삶의 기술(Arts of Life)이라고 했다⁸⁾. 또한 의식주에 관련되어 사람들이 행하는 물질의 생산과 소비에 대한 생각을 생활기술(生活技術)이라고 지칭하는 경우도 있다⁹⁾. 즉 생활기술이란 인간이 가장 최소한의 생존을 위해 마련하는 전략이며 이것은 가족이란 조직 내에서 학습에 의해 전승되는 경향이 강하다. 따라서 생활기술은 생활문화를 생산하고 소비하는 데 필요한 지식의 체계이다. 이런 면에서 생활문화란 집이란 공간에서 가구집단이 지니고 있는 생활기술의 총합을 가리킨다고 정의할 수 있다.

하지만 생활문화를 어떻게 접근할 것인가 하는 방법론적 문제에 접어들면 가정학이나 생활과학을 학습하지 않은 민속학자는 난관에 빠지는 경우가 많다. 비록 인류학자의 작업이지만, 다음의 예는 이러한 문제점을 여실히 보여준다. 전경수는

(『韓国の 郷村民俗誌(Ⅲ)——仁川廣域市江華郡篇』)¹⁰⁾ 라는 글에서 주거 생활은 주거형태의 걸모양만을 다루는 도구적인 측면만을 겨냥해서는 아니 되고, 그것을 구성하고 그 속에서 살고 있는 사람들의 구성과 사고를 보여줌으로써 걸모양으로만 보이기 쉬운 기술(technology)의 측면이 어떻게 전체 문화에 통합적으로 기능하는가를 살폈다. 즉 집의 형태를 중심으로 기본가족, 확대가족을 나누고 그들이 공간 속에서 어떻게 삶을 영위하는가를 중점적으로 조망했다. 그러나 음식 분야에서는 단지 주식·부식·별식·의례음식과 함께 음식의 보관법과 가마솥에 반찬하기와 같이 주로 조리법에 대한 서술에 머문다. 복식 분야에서는 더욱 이론적 견지를 가지지 못한 채 한복의 소비에 초점을 맞추어 사례를 나열하는 데 그쳤다.

이론이 앞서고 실천이 나아가지 못한 이와 같은 생활문화 연구를 개선할 수 있는 한 방법으로 필자는 일본의 생활재생태학이 한국학계에 도입될 필요가 있다고 본다. 다만 생활재(生活財)라는 용어가 한국사회에서는 생소한 것이라 번역의 문제가 제기된다. 일반적으로 쓰이는 용어로 생활재와 비슷한 의미를 지닌 말로는 생활용품이란 것이 있다. 즉 다른 상품의 생산 또는 서비스를 산출하기 위하여 판매되는 상품을 생산재라고 하는데 반하여 의식주와 관련되는 소비재 상품을 생활용품(生活用品)이라고 한다. 그러나 집이란 공간에 배치되는 물건은 결코 의식주와 관련되는 소비재 상품만이 존재하는 것은 아니다. 각종 문서류와 서적, 의례와 관련된 물건도 존재하기 마련이다. 이런 면에서 생활용품이란 말은 생활재에 비해서 한정된 의미를 내포한다. 따라서 집이란 공간에 배치되는 모든 생활용품을 생활재로 이해하는 과정이 필요하다.

2 냉장고 속의 생활재를 통한 생활문화 연구¹¹⁾

경기도 성남시 분당구 서현동의 한 아파트에 거주하는 정보제공자 이민정(가명)은 1953년 울산광역시에서 태어나 고등학교까지 그곳에서 살았고, 결혼 후 성남시 구시가지의 아파트에서 살다가 분당 신도시가 개발되면서 현재의 28평형 아파트로 이사를 했다. 현재는 주부 겸 글짓기 지도를 한다. 남편 김진섭(가명)은 1945년생으로 강원도 양양군에서 태어나 강릉시에서 주로 성장했으면 현재는 회사원이다. 이들 부부 사이에는 1980년생의 딸 하나가 있는데 현재 대학생이다.

이 집의 월 평균 수입은 약 360만원으로 그 중에서 월 평균 210만원 정도가 지출로 나 가며 월 평균 음식소비에 지출하는 금액은 약 60만원이다. 따라서 전체 지출 대비 음식소비비의 비율은 약 29%이다. 이러한 앵겔지수 비율은 도시형 중산층에 속한다. 조사기간 6일 동안의 음식구입 현황을 표로 정리하면 다음과 같다.

대단위 아파트 단지에서 사로 있는 정보제공자는 음식재료를 구입하는 형태가 세 가지로 나누어진다. 주로 쌀·음료수·과일과 같이 한꺼번에 많이 구매해야 하는 것은

주말을 이용하여 인근 대형 백화점의 식품매장에서 구입한다. 그러나 주중에 소량의 음식재료가 필요할 때는 아파트 상가에 있는 슈퍼마켓에서 구입한다. 아울러 음식을 특별히 조리할 시간이 없는 경우에는 아파트 상가의 반찬가게에 가서 완전 조리된 반찬을 구입하기도 한다. 이런 일은 보통 2 주일에 한번 정도 있다. 대량으로 구매한 음식재료는 주로 냉장고에 보관한다. 표 2는 조사기간에 정보제공자의 냉장고에 들어 있는 식품재료를 정리한 것이다.

오늘날 한국에서 가정용 냉장고가 보편화되면서 기왕의 음식재료 혹은 반가공 음식의 보관고였던 찬장이 그 기능을 상실하고 냉장고가 그 역할을 하고 있다. <표 2>에서도 알 수 있듯이 음식재료를 모두 구입에 의존하는 이 집의 경우 일주일에 한번씩 대형 백화점 식품매장에서 필요한 음식물을 구입하여 대부분을 냉장고에 보관하고 있다. 특히 냉장고의 냉동실에는 장기간 저장할 음식재료들을 보관한 데 비해, 냉장실에는 주로 반찬류를 보관한다. 냉장실에는 김치류와 반찬류가 주류를 이루지만 참깨, 참기름, 케첩, 마요네즈, 고춧가루, 불고기양념, 실고추 등과 같이 충분히 상온에서 저장이 가능한 것도 냉장실에 넣어 신선도를 유지해야 하는 것으로 믿는다.

이것은 서구의 냉장고가 주로 냉동실 위주로 구성되어 있는 반면에 한국의 냉장고가 냉장실 위주로 구성되어 있는 데서도 이유를 찾을 수 있지만, 밥을 중심으로 한 많은 반찬 가짓수로 이루어진 한국음식의 구조가 냉장실을 절대적인 위치에 놓이게 한다. 특히 이 집과 같이 부부가 일을 하고 아이가 한 명인 도시에 사는 부부가족의 경우 음식재료의 구입과 조리에 많은 시간을 투여하지 않기 때문에 더욱 냉장고에 많은 음식재료가 들어가 있다.

표 1 성남시 분당구 김진섭 집의 6일 음식구입비 내역

일차	내역 (단위:원)	계
1	부식 (9,000) , 부식 (8,360)	17,360
2	명태포 (3,000) , 양상추 (1,500) , 무 (1,000) , 물미역 (3,000) , 해초무침 (10,000) , 생선 (10,000) , 나물류 (6,000)	34,500
3	빵 (3,000)	3,000
4	외식 (순대국;12,000)	12,000
5	빵 (3,700) , 김미역 (5,000) , 아이스크림 등 간식 (9,000) , 물미역 (1,000)	18,700
6	빵 (4,000) , 낙지 (13,000) , 쇠고기 (10,000) , 만두 (10,000)	37,000
총계		122,560

표 2 성남시 분당구 김진섭 집의 냉장고에 들어 있는 음식물 내역

구분	음식종류
냉동실	투게터아이스크림 1 통, 아이스크림바 2 개, 원두커피가루 약 70g, 냉면용 면 1 봉지 (약 500g) , 조미하지 않은 생김 2 봉지, 검은팥 약 500g (한 봉지) , 붉은 팥 약 500g (한 봉지) , 양미리 20 마리 얼린 것 약 1kg, 가는 멸치 약 100g, 굵은 멸치 300g , 손질한 새치 5-6 마리, 마른 오징어 약 10 마리, 북어채 약 100g, 콩잎 찜 얼린 것 약 1kg, 고추튀김용 고추 약 200g, 굴 1 봉지 약 200g, 칼국수용 면 약 500g, 쇠고기 1근, 시래기 얼린것 약 700g, 김치 얼린 것 1kg
냉장실	<ul style="list-style-type: none"> • 김치류→깍두기 약 300g, 배추김치 약 1kg • 반찬류→무장아찌 약 300g, 김볶음 약간, 멸치볶음 약 200g, 도라지 고춧가루 무침 약간, 오이피클 약 1kg, 산초 장아찌 약 1kg, 오이장아찌 약 500g, 마늘 장아찌 약 400g • 채소류→배추 약 200g, 참나물 약 300g, 파 조금, 무 1개, 양배추 반 통 • 양념류→참깨 약 200g, 참기름 새 것 약 1kg, 케찹 약 200g, 마요네즈 아주 조금, 고춧가루 약 200g, 된장 조금 덜어놓은 것, 멸치가루 약 300g, 마늘 다진 것 약 50g, 초고추장 약 300g, 불고기 양념소스 약 200g, 실고추 조금 • 기타→빙수용 제리 약 200g, 잣 아주 조금, 밥 100g, 달걀 8 개, 원두커피 약 300g, 연유 약 500g, 우유 약 0.6L, 맥주 두 병, 마가린 조금, 딸기잼 100g, 버터 새 것 약 300g

아울러 이 집에는 냉장고 외에도 음식재료가 싱크대의 찬장 및 베란다에도 위치하는 데 그 내용은 다음 표와 같다.

그런데 김진섭 집의 냉장고와 집안 각 곳에 있는 음식물의 종류와 내용을 통해 이 집의 일상적인 식사구조를 예측할 수 있다. 주로 한국음식을 만드는 데 반드시 필요한 양념류가 냉장고의 냉장실에 보관된다. 그만큼 밑반찬류, 국, 찌개가 일상식사의 주류를 이룰 가능성이 많다. 현지조사를 통해 확인한 바에 의하면, 이 집의 주식은 쌀밥이다. 특별한 일이 없는 한 아침과 저녁의 주식은 쌀밥을 먹는다. 주로 먹는 국은 무된장국과 쇠고기 미역국이다. 반찬으로는 배추김치, 총각무김치, 생야채 (상추, 배추, 양상추 등), 무말랭이, 도라지 고춧가루 무침과 같은 채소류와 임연수 구이, 말린 갈치 조림, 북어 고추장 조림, 장조림 등이다. 특히 이 집의 가장이 장릉출신이기 때문에 해초무침인 지누아리, 김무침, 미역나물 등을 반찬을 즐겨 먹는다. 평소 점심은 집에는 먹는 사람이 없으며, 휴일에는 보통 멸치국물에 만 국수가 자주 식탁에 오른다.

표 3 성남시 분당구 김진섭 집의 찬장 등에 들어 있는 음식물 내역

구분	음식종류
냉장고 옆 찬장	조미가 된 김 새것 1 봉지, 유가 약 20 개, 녹차티백 약 20 개
가스렌지 옆 찬장	딸기잼 새 것 800g, 꽃소금 약 1kg, 프림 새 것 2 봉지 (2kg), 흰 콩 약 500g, 설탕 약 1.5kg, 먹던 프림 약 200g, 후추 조금, 맛소금 덜어놓은 것 조금, 와인 약 1kg, 꼬냑 새 것으로 1 병, 먹던 인스턴트 커피 약 400g, 조금씩 덜어놓은 인스턴트 커피, 설탕, 프림, 찬장 아래에 쌀이 약 10kg
가스렌지 아래 찬장	물엿 약 1kg, 참기름 아주 조금, 옥수수 식용유 500g, 요리술 (미림) 약 4kg, 콩 식용유 약 800g, 조림간장 새 것 1.8L, 먹던 조림 간장 아주 조금, 국간장 1kg, 식용유 새 것 두 병 약 1kg, 감치미 약 700g, 인스턴트 크림스프가루 약 300g, 맛소금 약 300g, 탈지분유 약 1kg, 현미쭈살 약 2kg
베란다	구입한 된장, 고추장 각각 약 2kg, 사과 12 개, 매론 1 개, 고구마 약 1kg, 최근에 빵은 고춧가루 약 1kg

하지만 전통음식이 주로 소비된다고 하여 이 집의 음식소비 구조가 전형적인 한국식이라고 보기는 어렵다. 즉 이 집의 음식재료 구입은 철저하게 상가와 백화점을 통해서 이루어진다. 분당구에 인접한 모란장과 같은 재래시장에서 음식재료를 구입할 수도 있으나 그렇지 못하다. 왜냐하면 집에서 조리하는 음식은 대부분 간단하며, 장기간 보관할 음식은 주로 식품회사에서 생산한 것을 사서 먹기 때문이다. 한국인의 주된 반찬인 김치도 이 집에서는 구입해서 먹으며 음식조리의 기본이 되는 간장,

냉장, 고추장도 모두 사서 먹고 있다. 이런 이유로 인해 장기저장 음식을 저장할 수 있는 별도의 공간인 장독대 혹은 장독이 이 집에는 존재하지 않는다. 일반적으로 아파트 생활을 하는 한국의 가정에도 이들 저장음식을 보관하기 위한 장독이 1-2 개 있다는 사실과는 다르다. 아울러 최근 개발된 김치냉장고도 이 집에는 없다. 그만큼 장기저장용 음식을 자급자족하지 않는다.

반면에 케첩, 마요네즈, 버터, 딸기잼 등과 같은 서구의 양념도 냉장고에는 반드시 마련되어 있다. 그만큼 한국적인 식사를 하면서도 동시에 이들 재료가 필요한 샌드위치, 볶음밥 등도 특별 식사로 마련된다. 커피는 이 집의 음료로 가장 으뜸에 드는 것이다. 비록 녹차티백이 준비되어 있지만, 이것은 손님을 접대하기 위해 쓰인다. 주로 음료로 커피를 주로 마시는 주부 이민정의 기호로 인해 인스턴트커피와 원두커피는 항상 집안에 마련되어 있는 편이다.

그런데 이 집에서 발견하는 특이한 점은 조리기구와 식사기구가 살림살이의 규모에 비해 그 종류가 다양하고 가짓수도 많다는 것이다. 이것은 오늘날 판매하는 조리기구가 한국형 아파트 생활에 적합하게 구성된 것이 아니라, 서구형 조리기구가 주류를 이루기 때문이다. 가령 프라이팬이 중형 4 개, 소형 2 개로 총 6 개나 된다. 그러나 주로 사용하는 것은 중형 2 개이다. 나머지는 주부의 구매욕구로 인해 마련된 것이다. 전자레인지와 식기세척기 등의 전자제품 역시 자주 쓰이지 않는다. 단지 아파트 생활에서 반드시 갖추어야 하는 것으로 인식하여 구매를 했다. 그러나 식사기구인 밥그릇과 숟가락, 젓가락은 사람마다의 제 것이 있으며, 이것은 소유권이 분명하게 나타난다. 아울러 좌식으로 식사를 하는 교자상이 별도로 없다. 이것은 이 집이 손님을 맞이하는 경우가 적다는 점을 시사한다. 특히 형제관계에서 장남이 아니기 때문에 대규모의 제사나 잔치가 집에서 이루어지지 않는다는 점에서 교자상의 필요성이 특별히 없다.

이렇게 서구형 공간과 사회시스템에 놓여 있는 이 집도 일상적인 식사는 전형적인 한국식으로 유지된다. 심지어 외식의 경우에도 해물탕이나 순대국과 같이 한국형에 기울어 있다. 이 점은 이 집 부부의 나이가 50 대로 보수적인 성향을 띠고 있기 때문이다. 이런 면에서 서구식의 외형적 공간 속에서 사람들의 삶은 여전히 한국형을 유지하고 있음을 확인 할 수 있다. 다만 빵을 즐겨 먹는다는지, 커피, 양주, 포도주와 같은 음료와 술은 모두 서구형을 쫓고 있는 점은 오늘날 도시 한국인의 변화되는 음식소비 형태를 알 수 있는 좋은 사례가 된다.

3 한국에서의 생활재조사의 필요성

필자는 앞에서 냉장고와 주변의 음식물을 통해서 한국의 도시형 아파트에 거주하는 50 대 부부가족이 지닌 음식 소비의 한 단면을 살펴보았다. 우리가 오늘

논의하려는 현대한국사회에서의 생활문화 연구에 생활재생태학에 근거한 생활재 조사가 얼마나 효과적인 방법이 되는가도 점검해 볼 수 있었다.

종래 한국학계에서 생활문화에 대한 연구는 사회학적 계량연구에 집중되어 온다. 특히 정기적으로 정부의 통계청에서 ‘인구주택총조사’, ‘사회통계조사’, ‘사회지표조사’ 등의 계량적인 조사를 행하고 있지만, 구체적으로 한국인의 생활문화가 어떻게 구성되는가에 대해서 심층적인 접근을 하지 못한다. 가령 사회통계조사에서 주로 행하는 계량적인 조사의 항목을 보면 이 조사가 정부의 정책 수립을 위한 조사에 목적이 있음을 알 수 있다.

- 가족 : 노후준비방법, 노부모 부양에 대한 태도 등
- 소득, 소비 : 소득만족도, 소비생활만족도, 건축 소비지출항목 등
- 노동 : 근로여건 만족도, 직업선택 요인, 여성취업에 관한 태도 등
- 교육 : 자녀교육의 목적, 교육기회 미 충족이유 등
- 보건 : 건강관리방법, 의료 서비스에 대한 만족도 및 불만이유 등
- 주거, 교통 : 원하는 주택형태, 통근·통학 소요시간 등
- 정보, 통신 : 정보통신기기 보유, PC 사용능력, 사용용도, 사용시간 등
- 환경 : 농약오염에 대한 불안, 환경오염 정도평가 등
- 문화, 여가 : 신문구독빈도 및 관심분야, 여가활용방법, TV 시청시간 등
- 안전 : 범죄피해에 대한 두려움의 정도, 야간보행시 안전도 등
- 사회참여 : 주관적 계층의식, 사회문제에 대한 견해, 사회적 이동에 대한 이해 등

한편 한국소비자보호원과 연결된 인터넷 사이트 쇼핑인포넷에서 분류하고 상품분류는 위와 같은 주제 분류와는 다르다. 주로 생활용품 중심을 최근 많이 판매되는 것을 앞에 내세워 분류를 하고 있다¹²⁾. 비록 생활재 조사의 분류로 이 내용을 사용하기에는 무리가 있지만, 이를 통해서 오늘날 한국사회의 생활재가 어떤 구성을 하고 있는지를 알아차리는 데 도움이 된다.

- 컴퓨터 : 데스크탑, PC, 노트북 등
- 가전 : 세탁기, 냉장고, TV 등
- 통신/사무기기 : 전화기, 휴대폰, 복사기, 팩스 등
- 도서/음반/영상물 : 책, DVD, 비디오 등
- 티켓/상품권 : 티켓, 상품권 등
- 화장품 : 여성용, 남성용, 향수 등
- 레저/스포츠용품 : 골프, 자전거 등
- 자동차 : 각종차량, 카인테리어 등

- 미용/건강용품 : 의료보조기, 안마기, 의약품 등
- 사무용품/문구 : 복사지, 필기구 등
- 의류/잡화 : 의류, 가방, 구두, 시계 등
- 출산/유아/아동 : 임신복, 기저귀, 유모차 등
- 가구/생활용품 : 생활가구, 주방용품, 욕실용품 등
- 식품 : 과자, 농축산, 가공식품 등
- 기타 : 꽃, 애견용품 등

일본의 생활재생태학 조사가 상품과학연구소를 중심으로 사용자의 입장에서 상품이나 서비스에 대한 연구, 조사, 테스트를 통해서 사용자의 욕구를 생산자에게 전달하기 위해서 이루어져왔다는 사실은 주지하는 바와 같다. 이것은 사회적 트렌드가 어떤 경향을 지니고 변화하는가에 대한 문제의식에서 출발하여 상품의 기획과 생산과정에서 소비자의 욕구를 반영하도록 만드는 데 일정한 기여를 했다. 동시에 생활문화 연구자에게는 구체적인 물적 자료를 제공해 주었다. 이를 바탕으로 현대 일본인의 생활문화를 살피는 일은 마치 현대의 고고학과 같다.

그러나 한국에서는 국내학자가 주동하여 이런 방법으로 생활재 조사가 시행된 적은 아직 없다. 다만 가정에서 쓰이는 전자제품을 생산하는 기업에서 한국형 전자제품을 생산하기 위해 이와 유사한 연구가 행해진 적이 있다. 1990년대 초반 한국형 냉장고, 청소기 등을 개발한 LG 전자의 경우, 아파트의 실내를 회사 내에 설치하여 연구원들이 일상적인 아파트 생활을 하면서 자사 전자제품의 실생활 적용과정을 연구한 적이 있다. 그러나 이러한 경향은 일시적인 것에 머물고 말았다. 특히 그들이 의도한 것은 외국에서 개발된 생활용품을 한국인의 생활방식에 맞도록 조정하는 작업이었지, 생활재의 트렌드에 대한 종합적인 조사는 아니었다.

더욱이 생활문화와 밀접한 관련을 지닌 의식주에 대한 식품학, 복식학, 건축학에서의 연구는 주로 전통적인 경향성에 대한 연구와 새로운 개발을 위한 연구에 집중되어 생활문화의 현상에 대한 접근을 거의 하지 못하고 있다. 특히 생활문화의 중심축을 이루는 의식주와 관련된 학문이 종전에는 가정대학 내에 함께 편제되어 있었으나, 실제로 학제적으로 총합적인 공동연구보다는 독자적인 연구에 집중해온 것도 일본과는 다른 배경이다. 이러다 보니 사회학에서는 정부의 정책 수립을 위한 거시적인 계량연구를 주로 해 왔고, 식품학, 복식학, 건축학에서는 각기 다른 학문적 경향성으로 인해 이를 통합하는 생활문화에 대한 학문적 조사연구를 행할 수 없었다.

2000년 10월 일본 국립민족학박물관에서 기획한 한일생활문화 교류전 준비를 위한 조사연구의 한국 측 파트너로 조직된 ‘집연구회’는 종래 개별적인 생활문화에 대한 접근을 총체적으로 수행하기 위해서 연구자의 구성을 다변화하는 데 목표를 두었다.

문화인류학을 핵심적인 학문으로 설정하고, 각각 음식, 옷, 건축, 가족, 신앙, 의례 등을 연구하는 연구자로 연구회를 조직했다. 당초 일본의 생활재생태학에 대한 이해를 기초로 하여 ‘생활문화연구회’ 혹은 ‘생활재연구회’와 같은 명칭으로 연구회를 구성하려 했지만, 각각의 용어가 지닌 정향성 때문에 채택되지 않았다. 결국 한국어의 ‘집’이 생활문화의 실천적인 공간이라는 데 주목하여 이를 연구회의 명칭으로 정했다. 앞서서도 밝혔듯이 ‘집’은 살림집(housing)이란 건축물과 그 구성원을 가리키는 가구집단(household), 그리고 그 속에서 사람들이 행하는 활동을 포괄할 수 있는 일상적인 용어이다. 이런 면에서 문화 행위자의 입장에서 구사되는 일상적인 용어를 학술적인 용어로 상승시키는 데도 집연구회의 명칭은 효과적일 수 있다는 판단을 했다. 따라서 ‘집연구회’는 한국을 중심으로 하여 ‘사람+공간+물건’이 지닌 상호관계를 문화적으로 연구하는 모임이다.

사이구사 사이코(三枝佐枝子)는 『生活財生態學Ⅲ』의 머리말에서 “어느 정도의 사물(모노)이 가정에 있고, 그것이 과연 유용하게 사용되고 있는가 어떤가. 거기에 숨어 있는 인간과 물건과의 관계가 어떤 것인가. 물건이 놓여 있는 가정경관(家庭景觀)은 어떤 것인가를 면밀히 조사 연구해 온” 것이 일본의 생활재생태학 조사연구의 목표라고 밝힌 바 있다. 이런 의미에서 ‘집연구회’의 연구는 집이라는 공간에 놓인 물건을 조사하고 이것이 사용자와 지닌 문화적 의미를 밝히는 데 있기 때문에 한국판 생활재생태학을 연구하는 모임이라 해도 과언이 아니다.

그러나 ‘집연구회’는 지난 1년여 동안 이러한 중요성을 각기 다른 학문적 지향성 속에서 합치시키는 데 많은 시간을 투여해 왔다. 초기에는 일본의 생활재생태학에 대한 이해를 위해 모임을 진행시켜 왔으며, 그 후에는 각자의 전공에서 바라보는 생활재생태학의 가능성에 대해 토의를 했다. 이를 바탕으로 부분적으로 생활재조사를 행한 바 있다.

이것이 바탕이 되어 2001년 5월 한국문화인류학회 전국대회에서는 ‘집과 문화’라는 분과를 별도로 조직하여 패널 발표를 하여 한국의 문화인류학자들에게 많은 관심과 지지를 받았다. 이날 발표된 논문은 다음과 같다. 「문화로서의 주거 연구 고찰」(이희봉), 「집과 음식행위의 상관성에 대한 연구」(주영하), 「주거공간에 따른 의생활의 양상——한옥과 아파트에서의 내의류 착용 양상의 변화를 중심으로」(지윤영), 「아파트에 구현되는 종교성」(오문선).

그러나 전면적인 생활재 조사를 통한 연구가 시행되지 않았기 때문에 몇 가지의 현상을 가지고 문화적인 해석을 하려는 경향이 발표논문 전체에서 드러났다. 아울러 아파트라는 동일한 형태의 주거공간을 발표자들이 선정한 듯하지만, 실제로는 각기 다른 내용의 아파트 가구집단을 선택했다는 면도 문제가 되었다. 따라서 특정한 도시의 선정과 일정한 경제수준, 유사한 가구집단의 구성 등과 같은 기준들이

필요하다. 아울러 유사한 유형과 상이한 유형을 비교하는 작업도 요구된다.

오늘날 한국사회는 근대(modern)를 뛰어넘어 서구형 생활문화가 지배적이다. 특히 2000년에 접어들어 한국인의 전체 주택 중에서 아파트는 47.7%에 이른다. 더욱이 아파트를 비롯하여 연립주택과 다세대주택과 같은 서구형 밀폐 거주공간이 전체의 59.2%에 가깝다¹³⁾. 전통적으로 한국의 살림집은 개방형을 지니고 있었다. 비록 방(房)은 밀폐형이지만, 마루와 마당, 장독대 등은 개방형이었다. 개방형이 밀폐형으로 바뀌면서 전통적인 공간 인식이 바뀌고 있으며, 옹기·세숫대야·술 등의 물건은 사라지거나 잔존물의 형태로 변형을 가져오고 있다. 물건과 공간의 변화는 사람들의 생활방식과 인식을 다르게 할 가능성이 많다.

따라서 오래된 물건이 새로운 공간에서 어떻게 변이·적응되는가의 문제는 현대 한국인의 생활문화를 이해하는 데 반드시 요구되는 작업이다. 민속학은 근대적 학문이지만 전근대에 대해 주로 관심을 가져왔다. 전근대에 대한 이해를 바탕으로 전근대에서 근대로의 변이과정에서 오래된 관습이 어떻게 변이되는가를 밝히는 작업은 민속학이란 학문이 오늘날 수행해야 할 중요한 연구목표이다. 이런 면에서 생활재생태학의 방법을 수용한다면 한국인의 생활문화가 전근대적인 양상에서 근대적인 양상으로 변이될 때 나타나는 구체적인 과정을 조망할 수 있으며, 이를 통해서 한국인이 지닌 문화적 코드를 분명히 드러낼 수 있다.

4 한국판 생활재보유조사표의 방향에 대하여

한국에서의 본격적인 생활재생태학 연구를 위해서는 한국판 생활재보유조사표를 작성하는 일이 선행되어야 한다. 이미 이번 전시를 위해 사또 코우지 선생이 이원태 씨 집의 물건을 세밀하게 조사한 바 있다. 이 조사결과는 한국판 조사표를 작성하는 데 기본 자료가 될 것이다. 아울러 일본에서는 (株)CDI에 의해서 생활재보유조사표가 작성되어 있다. 그런데 사또 코우지 선생의 작업과 CDI의 조사표는 약간 다른 분류 시스템으로 이루어졌다. 가령 CDI의 조사표는 현관용품을 제외하면 모든 분류항목이 가구, 냉난방기구, 부엌용기구 등과 같이 용도별로 이루어져 있다. 이에 비해 사또 코우지 선생의 작업에서는 가족 구성원의 개인과 함께 현관, 화장실, 거실 등과 같이 공간이 기준이 되어 분류를 하였다.

조사자의 입장에서는 용도를 기준으로 하여 조사표를 작성할 경우 생활문화를 분석하는 데 유용한 정보를 곧장 얻을 수 있기 때문에 좋다. 그러나 피조사자의 입장에서는 본인의 집에 있는 물건을 얼마나 기억하고 있는가가 관건이 될 수 있다. 이런 면에서 공간별로 조사를 하는 방법은 피조사자의 입장에서 훨씬 편리하다. 그런데 일본의 생활재보유조사표가 용도별로 작성된 데는 문화적 측면이 반영된 것은 아닌지 궁금하다. 물론 물건이라는 것이 상품일 때나 가정 속에 배치될 때

사용자의 입장에서 가장 우선시되는 점은 용도일 것이다. 그러나 한국의 경우 물건 자체의 세세한 용도보다는 사용자의 공간 이용과 물건의 배치가 더욱 의미를 지닐 가능성이 많다.

앞에서 예를 들었던 김진섭 씨의 경우에서 보았듯이, 한국의 도시 아파트에서 냉장고는 실제 음식의 냉동과 냉장이라는 용도를 뛰어넘어 음식물의 보관 공간으로 이해되기도 한다. 특히 냉동과 냉장의 선택은 다분히 사용자의 선택에 달려 있을 때도 많다. 일반적으로 냉장실에 놓여지는 것은 반드시 냉장해야 하는 냉장식품은 물론이고, 고춧가루, 멸치, 건미역과 같이 상온에서 보관해도 되는 것이 들어가기도 한다. 특히 일본의 생활재보유조사표에서 분류한 자가제 보존식품, 자가제 냉동식품, 통조림 식품, 병에 든 식품, 인스턴트 식품, 냉동식품, 가공식품, 조리식품, 곡류, 생선식품, 유지와 조미료, 음료, 과자류, 약용건강자연식품 등의 구분이 한국인 사용자에게 얼마나 엄격하게 구분될 수 있을지도 의문이다.

또 다른 예로써 한국 아파트의 욕실을 들 수 있다. 일반적으로 화장실과 욕실은 같은 공간에 배치된다. 이 경우 사용자의 입장에 따라 같은 공간은 욕실 혹은 화장실이라고 각각 불린다. 일본의 생활재보유조사표에는 화장실용품, 욕실용품, 치약과 샴푸류, 세면용품, 그리고 타올 등이 구분되어 있지만, 한국인의 경우 이러한 구분이 생활문화를 이해하는 데 얼마나 도움이 될 수 있을지 모르겠다. 이원태 씨 집의 화장실에 있는 물건 목록만 보아도 이런 점을 쉽게 이해할 수 있다. 변기를 중심으로 화장실용품이 있지만, 변기 물탱크 위에는 샴푸, 칫솔 등이 있으며, 심지어 세탁용품과 청소용품도 화장실 안에 자리를 잡았다. 이른바 한국 아파트의 화장실은 변소, 세면, 목욕, 세탁용품의 보관(이원태 씨 집의 경우 세탁기가 부엌에 있다), 청소용품의 보관 등과 같이 다용도로 쓰이기도 한다.

따라서 한국판 생활재보유조사표의 작성에서는 우선 공간을 상위에 두고 용도를 하위에 두는 문화적 분류가 필요하다. 특히 1970년대부터 건축된 한국의 도시형 아파트는 시대적 유행과 욕구에 따라 그 형태를 달리하기 때문에 공간의 변화가 비교적 많은 편이다. 가령 <방 3+거실 1+부엌 1+욕실 2+현관> 의 구조에서도 다용도실의 존재여부, 배란대의 넓이, 욕실의 구성 등이 시대별, 시공업체별로 약간씩 다르다. 이것이 일본처럼 일정한 틀로 이루어진 공동주택과 다른 점이다. 이런 의미에서도 사람을 중심으로 둔 공간을 상위에 두는 분류법이 한국에서는 유용할 수 있다.

하지만 공간 중심의 생활재보유조사표만으로는 각각의 생활재가 지닌 용도를 밝히는 데 문제가 있을 수밖에 없다. 일본 생활재보유조사표의 경우, 각각의 생활재에 구입의욕, 즉 새로 물건을 살 의사를 밝히는 부분과 사용빈도를 표로 표시하게 되어 있는데, 여기에 용도도 표시하게 하는 방식을 채택하면 이 문제를 해결할 수 있을 것이다. 따라서 한국판 생활재보유조사표의 대분류는 공간, 중분류는 용도별, 그리고 가짓수는 소분류의 방법을 채택하면 될 것으로 여겨진다. 가령

식탁보의 경우 KI1401 이 되면, KI 는 식당, 14 는 식탁용품, 01 는 식당에 있는 생활재의 가짓수 목록이 된다. 그 구체적인 예는 다음과 같다.

예) 항목 분류

KI: 공간, 14: 용도별, 01: 생활재 목록

KI1401 식탁보 있다 () 없다 (), 신규매계획 (O, △, X)
 용도 (), 사용자 ()
 생활재 내력 구입, 시기 (), 선물, 시기 ()

한국판 생활재보유조사표의 대분류인 공간의 구분은 다음과 같이 문자로 표시하는 방법이 유용하다. 이것은 공간 식별에도 도움이 되며, 아파트가 아닌 단독주택의 경우 공간이 추가되어도 혼란이 없을 수 있다. 아파트의 경우 다음과 같이 분류할 수 있다.

예) 대분류

MM: 공간

- LO 복도 : 아파트 복도에도 장독, 자전거 등이 놓여 있는 경우가 있음
- EN 현관 : 문에서 거실 혹은 주방까지의 공간
- VM 베란다1: 거실과 통하는 베란다
- VS 베란다2: 방과 통하는 베란다, 단 없을 수 있음
- ST 창고 : 베란다의 부속공간으로 설치되는 경우도 있음
- MM 다용도실1: 주로 세탁실로 사용됨
- MS 다용도실2 (없을 수 있음): 세탁실과 별도로 실내에 창고가 위치할 수 있음
- BA 욕실 (화장실): 주로 사용하는 욕실이며, 화장실과 겸용
- TO 화장실 (욕실): 안방에 부속된 화장실로 샤워만을 할 수 있도록 구성
- KI 주방 : 싱크대, 조리대, 가스대로 구성된 공간
- DI 식당 : 입식 테이블 공간, 단 식사를 하는 공간으로 쓰이지 않는 경우도 있음
- RE 냉장고 : 일반 냉장고와 김치냉장고를 포함
- LI 거실 : 소파와 텔레비전이 놓인 공간
- R1 방1: 안방에 해당, 가능한 사용자의 이름을 방의 명칭으로 붙일 필요가 있음
- R2 방2: 아이의 방으로 사용되는 공간이지만 사용자의 이름이 필요
- R3 방3: 아이의 방으로 사용되는 공간이지만 사용자의 이름이 필요

분류에서 마지막으로 고민해야 하는 항목은 중분류에 해당되는 용도별 구분이다. 필자는 (株) CDI 에서 만든 일본의 생활재보유조사표를 참조하여 한국판 용도별

중분류를 작성해 보았다. 앞에 붙인 번호는 중분류의 기준이 된다. 또한 오른쪽에는 일본의 생활재보유조사표와의 비교를 시도했다.

- 01 가구
- 02 장식용품
- 03 조명, 방법, 방재용품
- 04 냉난방 기구
- 05 부엌용 가구 (냉장고 포함)
- 06 개수대, 조리대, 가스대 소도구
- 07 솔, 프라이팬, 주전자 → 프라이팬 추가
- 08 전기, 가스 기구
- 09 물건 담는 그릇
- 10 조리용 소도구
- 11 커피, 차 기구
- 12 식탁용품
- 13 칼 종류
- 14 어린이용 식기
- 15 한국식기
- 16 서양식기
- 17 기타식기 → 한국식기도 서양식기도 아닌 것
- 18 젓가락, 숟가락, 스푼, 포크, 나이프 → 수저 추가
- 19 컵 종류
- 20 레저용 식기
- 21 자가 제조 저장식품 (반찬) → 일본의 경우 자가제조 보존식품과 냉동식품으로 구분
- 22 구입한 저장식품 (반찬) → 젓갈류 등이 포함
- 23 통조림, 병에 든 식품
- 24 인스턴트 식품
- 25 냉동식품
- 26 가공식품
- 27 조리식품
- 28 곡류
- 29 육류 → 일본의 경우 없음
- 30 생선 (건어물 포함)
- 31 양념류 → 일본의 경우 없음
- 32 유지, 조미료

- 33 음료, 주류 → 일본의 경우 음료에 포함
- 34 과자류
- 35 약용건강식품
- 36 학교관계 의류
- 37 남성의류 (양복)
- 38 남성의류 (한복) → 일본의 경우 없음
- 39 남성 구두, 모자, 신변잡품
- 40 남성 외출용품 (신분증 등 포함)
- 41 여성의류 (양복)
- 42 여성의류 (한복)
- 43 여성 구두, 모자, 신변잡품
- 44 여성 외출용품 (신분증 등 포함)
- 45 여행용품
- 46 남자아이의 의류
- 47 여자아이의 의류
- 48 유아용품
- 49 기타 신발, 우산류 → 일본의 경우 현관용품에 있음
- 50 침구
- 51 세탁용품
- 52 바느질용품
- 53 청소용품
- 54 화장실용품
- 55 욕실용품
- 56 비누, 샴푸
- 57 세면용품
- 58 수건류
- 59 이발, 머리화장용품
- 60 화장품류 (화장지 포함) → 화장지 포함
- 61 미용, 운동용 가구, 기구 (자전거 등 포함) → 일본의 경우 자전거는 아동용
- 62 의료용품 (약 포함)
- 63 신문, 잡지, 서적
- 64 문구, 사무용품, 학용품
- 65 장난감
- 66 오락기구
- 67 텔레비전, 비디오용품 → 별도 항목으로 분류

- 68 오디오용품
- 69 카메라용품
- 70 컴퓨터용품 → 별도 항목으로 분류
- 71 통신용품 → 별도 항목으로 분류, 일본의 경우 현관용품임
- 72 약기용품
- 73 수선용품 → 일본의 경우 일요목수용품으로 분류됨
- 74 취미용품
- 75 원예, 애완동물용품
- 76 자동차용품 (오토바이 등 포함)
- 77 친척관련 용품 (족보, 문서, 편지 등 포함) → 일본의 경우 없음
- 78 종교, 의례용품
- 79 수집한 물건
- 80 기타

5 맺음말

필자는 앞에서 한국판 생활재보유조사표의 대분류, 중분류의 예를 제시했다. 그러나 이것은 아파트라는 공동주택의 집을 대상으로 한 조사표에 지나지 않는다. 아울러 실제로 소분류의 세부 생활재 목록이 빠져 있기 때문에 완성된 것은 아니다. 아마도 실제 조사에 임하면 더욱 많은 세부 분류가 필요할 것으로 여겨진다. 특히 사또 코우지 선생의 이원태 씨 집 작업에서 나온 물건 목록을 기초로 한다면, 일단 초보적으로 완성된 한국판 생활재보유조사표를 작성할 수 있을 것으로 여겨진다.

사실 분류라는 것은 일정한 가치관이 개입된 것이다. 특히 나라별로 생활재보유조사표를 작성한다면 그 자체가 문화의 비교연구를 할 수 있는 좋은 자료가 된다. 위의 용도별 분류에서도 알 수 있듯이 일본의 생활재 분류와 한국의 것은 일정한 차이를 보인다. 가령 일본의 경우 자가제 보존식품과 냉동식품으로 구분할 수 있지만, 한국의 경우 자가제조 저장식품과 구입한 저장식품이 주류를 이룬다. 이것은 한국인이 저장식품을 중요시 여긴다는 점을 반영한다. 또한 친척관련 용품은 집안에 따라 차이를 보이지만 일반적으로 족보, 문서, 편지 등을 보관하고 있는 경우가 많다. 이것은 한국인의 가정생활에서 친척관계가 지닌 중요성을 보여준다. 특히 친척관련 문서에는 제삿날, 생일날 등과 같은 기념일을 적은 문서도 포함된다. 이런 의미에서 조사표의 작성은 문화의 표현이라 할 수 있다.

하지만 다른 의미에서 일본의 생활재보유조사표와 한국판은 상당히 유사하다. 현대 도시에서의 생활이 지구촌화 되는 경향이 반영된 것이다. 이런 의미에서도 중국의 도시 거주자 집까지 포함한 동아시아인의 현대생활에 대한 생활재생태학의 조사는

동아시아 문화권의 상이(相異)와 상사(相似)를 확인할 수 있는 의미 있는 민족학적 비교민속학적 작업이라 여겨진다.

동시에 일본에서 제기된 생활재생태학이 현재적 의미를 지니고 생활에 쓰이는 물건의 종류와 의미를 찾는데 집중한다면, 한국의 경우 이것을 통해서 오래된 관습이 어떻게 변이되는가에 더 중점이 두어질 가능성이 많다. 즉 생활재 조사를 통한 생활문화 연구는 통시적인 측면에서 전통의 변이과정에 대한 연구와 공시적인 측면에서 현대 한국인의 생활문화를 이해하는 데 중요한 방법론적 제안이 될 것이다.

주

- 1) 노명환 「지역학의 개념과 방법론——일상생활문화사를 중심으로」 한국외국어대학교외국학 종합연구센터 『국제지역연구』 제 3 권 제 1 호, 1999, p.12 에서 재인용.
- 2) 박부진 「거주공간의 이용관행과 가족관계」, 『성, 가족, 그리고 문화인류학적 접근』, 서울 : 집문당, 1998, 133-162 쪽.
- 3) 박부진 「가족의 위계구조와 공간이용」, 『가족과 문화』 제 10 집 2 호, 1998, 20 쪽.
- 4) Rosaldo, Michelle, Women, Culture and Society: A Theoretical Overview. pp.17-42 in *Women, Culture and Society*, edited by Michelle Z. Rosaldo and Louise Lamphere. Stanford: Stanford University Press, 1974, p.23.
- 5) 영어로는 home economics (미국) 혹은 domestic science (영국) 라고 한다. 20 세기 초에 생긴 말이다. 이 말이 일본을 통해서 가정학으로 번역되어 오늘에 이른다.
- 6) 서울 한양대학교 생활과학대학의 교육목표를 보면 일반적으로 생활과학이 의미하는 바를 이해할 수 있다. “현대 및 미래사회에서 요구되는 의·식·주 분야의 능력있는 전문인 양성을 위하여, 각 분야에 이론과 기술을 습득케 함으로써 미래의 다양한 환경에 대처할 수 있는 직업인으로서의 능력을 기르는데 있다. 이를 위하여 인간생활의 직접, 간접적인 환경 즉 의생활·식생활·주생활과 사회환경과의 관계를 연구하고 탐색한다.”
- 7) 장철수 『한국 민속학의 체계적 접근』, 서울 : 민속원, 2000, 46-47 쪽.
- 8) Tylor, Edward B., Abridged by Leslie A. White, 1960, *Anthropology*, Michigan: The University of Michigan Press, p.79.
- 9) 吉田集而(編)『生活技術の人類学』, 東京 : 平凡社, 1995, p.8.
- 10) 전경수 「의식주와 도구」, 『韓國鄉村民俗誌 (Ⅲ) ——仁川廣域市江華郡篇』, 성남 : 韓國精神文化研究院, 103-175 쪽.
- 11) 필자는 2000 년 3 월부터 12 월까지 서울과 경기도 일대의 음식민속에 대한 현지연구를 시행한 적이 있다. 구체적인 내용은 주영하, 「경기북부의 식생활」, 「경기동부의 식생활」, 『경기민속지』 (Ⅳ) 의 · 식 · 주편), 경기도박물관, 2001, 236-344 쪽을 참고하기 바란다.
- 12) <http://price.cpb.or.kr/>
- 13) 통계청 『2001 한국의 사회지표』, 대전 : 통계청, 2001, 326 쪽 ‘건축년도 및 주택형태별 주택 분포’ 조사에 의하면 1990 년에는 전국 주택 중에서 단독주택이 66%, 아파트가 22.7%, 1995 년에는 전국 주택 중에서 단독주택이 47.1%, 아파트가 37.5%였다.

문헌

吉田集而 (編)

1995 『生活技術の人類学』東京：平凡社

노명환

1999 「지역학의 개념과 방법론——일상생활문화사를 중심으로」
한국외국어대학교외국학종합연구소 『국제지역연구』 3 권 제 1 호.

통계청

2001 『한국의 사회지표』 대전：통계청.

박부진

1998 「가족의 위계구조와 공간이용」 한국가족학회 『가족과 문화』 10 (2) .

박부진

1998 「거주공간의 이용관행과 가족관계」 『성, 가족, 그리고 문화인류학적 접근』 서울：
집문당.

商品科学研究所

1993 『生活財生態学Ⅲ』東京：商品科学研究所+CDI.

장철수

2000 『한국 민속학의 체계적 접근』 서울：민속원. 전경수 1996 「의식주와 도구」 『韓國の
郷村民俗誌 (Ⅲ) ——仁川廣域市江華郡篇』 성남：韓國精神文化研究院.

주영하

2001 「경기동부의 식생활」 『경기민속지』 (Ⅳ의·식·주편) 용인：경기도박물관. 주영하
2002 「食口論——현대 한국사회에서의 음식관습」 『정신문화연구』 25 (1), 성남：
한국정신문화연구원.

Rosaldo, Michelle

1974 *Women, Culture and Society: A Theoretical Overview*. In Michelle Z. Rosaldo and
Louise Lamphere eds., *Women, Culture and Society*, pp.17-42 Stanford: Stanford
University Press.

Tylor, Edward B.

1960 Abridged by Leslie A. White, *Anthropology*, Michigan: The University of Michigan
Press.